

さるの婿さん むこ
京都府

むかし、春のほのぼのとしたいいお天気の日に、おじいさんが、畠に行きました。

かうちん、かうちんと畠をたがやしているうちに、腰こしが痛いたくなつてきました。それでも、もうちよつとだけと思って、また、かうちん、かうちんとたがやしていました。すると、もつと腰が痛くなつてしまいました。おじいさんは、よつこいしょと腰を下ろして、ひと休みしました。すると、むこうから、さるがやってきました。

「おじいさん、たいへんですね」

おじいさんは、

「おう。きばつてたがやしてたんだが、腰が痛うてどうにもならん」といひました。さるは、「おじいさん、おれがたがやしてやろうか」といひました。

「おお、そうか。おまえがたがやしてくれるなら、ありがたい」

「ああ、たがやしてあげよう」

さるはそういうと、くわをとつて、かうちん、かうちんとたがやしあはじめました。おじいさんが、「おまえ、じょうずにたがやすなあ」というと、さるは、顔もあげないで一生懸命けんめいたがやしました。畠のふちの草まで取つて、なにもかも一生懸命はたらきました。おじいさんは、うれしくて、「こりやあ、ありがたい。さるさんよ、おまえはほんまにいい子だなあ。うちには、お市いちつていまくわすめうかわいらしい孫娘まごむすめがいるんだが、この畠をぜんぶたがやしてくれたら、あの娘をおまえの嫁にやるぞ」といいました。さるは、調子ちょうしに乗つて、きばつて、きばつて、おじいさんが一日かかつてもたがやせないような畠をみんなたがやしてしまいました。そして、「おじいさん、いつお市を嫁にもらひに行こうか」ととききました。おじいさんは、あんまりうれしかつたので、つい、

「あさつての朝においで」といつてしましました。さるは、おおよろこびして、ぱあつと山へ帰つて行きました。

おじいさんは、家に帰ろうと歩きだしました。けれども、

「お市はさるの嫁に行つてくれるだろうか」と思うと、心配で心配で、だんだん足が重くなりました。日は西にかたむいてくるし、そろりそろりと歩いているうちに、日が暮れてしまいました。家に着いて、

「お市、もどつたよ」といふと、お市が、

「おじいさん、お帰りなさい」といつて出むかえました。でも、どうもおじいさんのようすがおかしいので、

「おじいさん、何かあつたんですか」ととききました。

「じつは弱ったことになつた。おまえにすまないことをしてしまつたわい」

「いつたいなにがあつたんですか、教えてください」

「今日は、腰が痛くて畑はたがやせないし、休んでいたら、さるが来てなあ。畑をぜんぶたがやしてくれたらお市を嫁にやるといったところが、さるは、きばつてたがやしてくれた。おまえにはすまんことをいつてしまつたと思うと、なかなか足が前に進まず、帰るのがおそくなつた」

すると、お市は、

「なんだ、そんなことを心配してゐるんですか。わたしはかまいませんよ」といつて、おじいさんを元気づけました。そして、

「おじいさん、わたしは、さるの嫁に行くけれど、お願いがあります」といいました。

「そりやなんだ」

「からつぼのたるを嫁入り道具どうぐに持たせてください。それから、三尺さんじある長いわらじを作つてください」

「それは、たやすいことだ」

つぎの日、おじいさんは、朝からトーントーンとわらを打つて、長い長い三尺もあるわらじを作りました。

あくる朝、お市は早くから髪かみを結ゆつてしたくして待まつっていました。そこへさるがやつて来ました。

「お市を嫁にもらひに来ましたよ」

お市は、

「おさるさん、嫁入り道具のこのたるを持つて行つてくださいな」といいました。さるが、たるをかつぐと、こんどは、おじいさんが作った長いわらじをそろえて出して出でて、

「おさるさん、これをはいてくださいな」といいました。さるが、長い長い三尺もあるわらじをはくと、お市は、おじいさんに、

「では、行つて来ます」といいました。おじいさんは、「行つておいで」といつて、見送りました。

さるは、先に立つて、べつたらべつたら、歩いて行きました。お市は、ちょこちょこ、ちょこちよこ、ついて行きました。そして、だんだん山の中に入つていきました。やがて、谷川にやつて来ました。そこに一本橋がかかっていました。さるは、

「お市、おまえ先にわたれ」といいました。お市は、

「いいえ。あんたが先にわたつてください」といいました。そこで、さるが先にわたりました。

お市はすぐ後についてわたりました。

橋の真まん中まで來たとき、お市は、さるの長いわらじのうしろをひよいと踏ふみました。さるは足をとられて、とんびんさんと、川へ落ちました。

さるは、どんぶりどんぶり流されました。さるが上になつてたるが下になり、さるが下になつてたるが上になりして、どんぶりどんぶり流れで行きました。お市は、そのようすがおかしくて、顔をかくして笑わらつてしましました。

さるは、上になつたとき、お市を見て、悲しくて泣かないていると思いました。そこで、「おれは死しんでもいいけれど、お市の泣くのがかわいそう」といしながら、どんぶりどんぶり流されていったということです。

それだけ

村上郁再話

資料『季刊民話1』民話と文学の会